

始皇帝西巡の線路及び沿線禁苑について

馬 彪

はじめに

- 一 先行研究とその問題と私案
 - 1 近年の関中秦漢離宮別館考古調査研究
 - 2 始皇帝の西巡行線路の研究
 - 3 始皇帝西巡行ルート of 私案
- 二 内史（近畿）における雍城旧都と涇水沿岸の禁苑
 - 1 秦の雍城旧都＝「聖都」の存在
 - 2 内史境内の雍城旧都の禁苑群
 - 3 隴坂道の通る涇水側の離宮
- 三 隴西郡の戦国秦長城と秦旧都の禁苑
 - 1 西周に西垂を保す犬丘・秦の大夫都
 - 2 大堡子遺跡の秦祖先地の発見
 - 3 戦国秦の長城と関塞
- 四 北地郡・内史における先秦長城・関塞・牧畜苑及び禁苑
 - 1 北地義渠道を巡行する目的
 - 2 鷄頭山関塞と秦昭王の長城
 - 3 烏氏保の牧業と国の牧畜苑
 - 4 果家山秦漢離宮遺跡
 - 5 涇水に沿う「簫関道」側の禁苑

むすび

はじめに

秦の始皇帝は全国を統一した翌年、地方を廻る第一回の巡行を行った。巡行先は、秦帝国初期における涇渭水上流流域であるが、その地域は行政地域として隴西郡全部・北地郡の全部・内史（近畿）の西半分にあたる（図1）。

また、その地が秦国の発祥地であることが特徴である。すなわち、秦帝国時代における隴西郡は渭水の水源地（今日にも「渭源」という地名あり）であり、古に秦の一族が東から渭水に遡り、秦亭（今甘肅省天水市清水県東北秦亭鋪郷）に至って定居した地域である。北地郡は、もとは義渠戎の地であったが、秦昭王のときその地を占領し、秦長城を築いた。郡は涇水の水源地（今日にも「涇源」という地名あり）であり、戦国時代秦国の牧場があったのは有名である。内史は都咸陽の近畿地域であり、その西半分は旧都雍城の所在地にあたり、雍は長い間、秦帝国首都咸陽の副都であった。

本稿は始皇帝の西巡線路への検討をしながら、このような涇渭水上流流域における

禁苑の分布や特徴を明らかにしたいものである。

一 先行研究とその問題と私案

1 近年の関中秦漢離宮別館の考古調査研究

この地域における秦の禁苑に直接的に関係する研究は、中国国家博物館田野考古研究センターをリーダーとして陝西省考古研究院・北京大学考古文博学院などが行っている、「陝西関中地区秦漢離宮別館考古調査研究」という共同プロジェクトがある。該当研究は2008～2012年にわたり、フィールド調査をしたあとに、秦漢離宮別館は分布では北山の南坡・渭河沿岸・秦嶺北麓という地帯に散在しており、また秦都雍城・咸陽及び漢長安・漢の甘泉宮を中心をとする特徴があると指摘された。¹地域としては本稿の研究範囲の一部、すなわち咸陽の以西と渭河沿岸等の地域が重なるので、その研究成果を参考にできると思うが、残念ながらその研究プロジェクトの研究成果を公表していないため、調査の結果はまだ分からない。今後その研究の簡報や報告書が期待されている。つまり、本論の主題となる秦帝国初期における涇渭水上流域禁苑の分布や特徴はまだ不明のままである。

2 始皇帝の西巡行線路の研究

2-1 禁苑律のみる巡行と禁苑 考古発掘以外、涇渭水上流域における秦帝国禁苑に関する文献の研究は殆どないといえる。しかし、近年、龍崗秦簡の簡15号に「皇帝に従って行き、禁苑中に舍（やど）る者は、皆……」（從皇帝而行、及舍禁苑中者、皆□□□□□□）という禁苑律が発見されて、秦朝の皇帝が巡行するとき禁苑に泊まるのが初めてわかった。² この新しい史料によって、始皇帝の涇渭水上流域への巡行線路がわかったら、その沿線に存在した禁苑がわかるはずであろう。したがって、歴代にわたる始皇帝の第一回目巡行線路についての検討は、重要な先行研究として紹介しておきたい。

秦の始皇帝の二十七年（前220）、咸陽の西方に隴西・北地二郡への巡行に関する文献史料は極めて少なく、『史記』秦始皇本紀に「二十七年、始皇巡隴西・北地、出鷄頭山、過回中」とわずか十八文字しかない。このように、始皇帝の旅線路に関する記載は簡潔すぎるので、今日まで歴代の学者はその記載にみられる「鷄頭山」と「回中」の位置について異なる解釈をした。主なのは唐代張守節説と元～宋代胡三省説と今日王京陽説という3つの解釈がある。

¹ 「2013年関中秦漢離宮別館遺址調査項目総結」 <http://www.chnmuseum.cn/tabid/1312/InfoID/96853/ftid/1217/Default.aspx> 中国国家博物館網より。

² 詳しい内容は拙著『秦帝国の領土経営：雲夢龍崗秦簡と始皇帝の禁苑』京都大学学術出版会2013年、第四章と附録Iを参照。

2-2 (唐) 張守節の解釈を紹介すると、以下の通りである。

張守節の『史記正義』に司馬遷のいう「鷄頭山」について『括地志』のいう「鷄頭山在成州上祿県東北二十里、在京西南九百六十里。酈元云蓋大隴山異名也」を引き、按ずるに「原州平高県西百里亦有笄頭山、在京西北八百里、黄帝鷄山之所」とした。

また、『史記正義』に司馬遷のいう「回中」について『括地志』のいう「回中宮在岐州雍県西四十里」を引き、案ずるに、「言始皇欲西巡隴西之北、從咸陽向西北出寧州、西南行至成州、出鷄頭山、東還、過岐州回中宮」とした。唐時代の成州は秦時代の隴西郡と漢時代の武都郡にあたる。『元和郡県志』山西道に「古西戎地也、後爲白馬氏国。(中略) 秦逐西羌、置隴西郡。秦末、氏・羌又侵拋之。元鼎六年平西南夷、置武都郡、今州界二郡之地」とある。鷄頭山は唐時代の成州上祿県にあり、『元和郡県志』山西道に「鷄頭山、在(上祿) 県東北二十里」とある。上祿県は秦の隴西郡上邽県である。

すなわち、唐時代の張守節が考えた線路は、始皇帝が咸陽を出てから、西北方面へ行って北地郡の寧州(今日の寧県)を経て、西南へ行き、隴西郡東南隅の成州(成県)に至って、鷄頭山を出てから東へ帰り、内史岐州の回中宮を経由したというものである。張守節の説を歴史地図³で確認すれば、図1のA線路となる。

この説で最も問題となることは、『史記』にみられる始皇帝の巡行線路は先に「鷄頭山を出」て、後に「回中を過」た道順と相反し、「回中を過」てから、「鷄頭山を出」たとなってしまう矛盾点がある。故に元～宋代の胡三省が『史記』にいう鷄頭山は隴西郡東南隅の山ではなく、北地郡にある山であるだろうとして、『資治通鑑』巻七秦紀二の注に異議を出した。

2-3 胡三省の解釈は以下の通りである。

「『史記正義』言始皇欲西巡、出隴右、向西北、出寧州、西南行至成州、出鷄頭山、東還過岐州之回中宮也。余謂上書巡隴西・北地、則先至原州之鷄頭山而還過回中、道里為順。若出成州之鷄頭、則須先過回中而後至鷄頭。以書法之前後觀之、居然可見」とある。元時代の原州は秦時代の北地郡にあたり、唐時代にも原州であった。『元和郡県志』関内道に「原州、『禹貢』雍州之城。春秋時地屬秦、始皇時屬北地郡。漢爲安定郡」とあり、「笄頭山、一名崆峒山、在(平高) 県西一百里、即黄帝謁広成子学道之処」とある。「笄頭」は『史記』五帝本紀に「鷄頭」と為す。

つまり、胡三省の考えた経路は、始皇帝は咸陽を出発してから、北方へまず北地郡(郡治は今日の寧県北)を巡行し、そして涇水をさかのぼって西方へ、鷄頭山(今日寧夏涇源県の鷄頭山)に至った。そこから西南方へ隴西郡(郡治は今日の臨洮)を視察し

³ 譚其驥『中国歴史地図集』第二冊(1) 秦地図、中国地図出版社、1982年。

た。帰りは渭水に沿い、東方へ行って、翼県・上邽県を経て、そして東北方へ、弦中谷の魚龍川（今日甘肅省華亭県の南）を出て、陝西省隴県の回中宮に至った。そのあと、汧水に沿って東方へ咸陽に戻ったと考えた。

2-4 今日の研究者の王京陽説があり、彼は先行研究において「回中」を「回中宮」と解釈したのは根拠がないと考え、顔師古のいう「或取安定回中為名耳」のように、「回中」が「関中」「漢中」と同じく「1つの区域の名称」であると判断した。回中というエリアは「應該在鷄頭山以西、由秦長城所抱的一片地方。這時的秦長城、在隴西一段是由臨洮（今岷県）向北大致沿河右岸修築、在隴西郡治（今臨洮）北又大致向東修築、這個由南而北再折向東的長城走向可以說是曲折迂回的。長城以內的這片地方也可能因此叫作『回中』了。始皇出鷄頭山之後、正是經過這個区域到達隴西郡的」とある。⁴ そして彼の考えた始皇帝が西巡した線路は、咸陽を出発し、北西へ北地郡治（今日慶陽西南）に到り、西に鷄頭山を出でず、回中を過て、隴西郡に到って、渭水に沿って東の咸陽へ返す。そうしてまさに関中の西北長城以内の辺境地域を巡って、辺境防衛を視察する目的を実現したとした。⁵

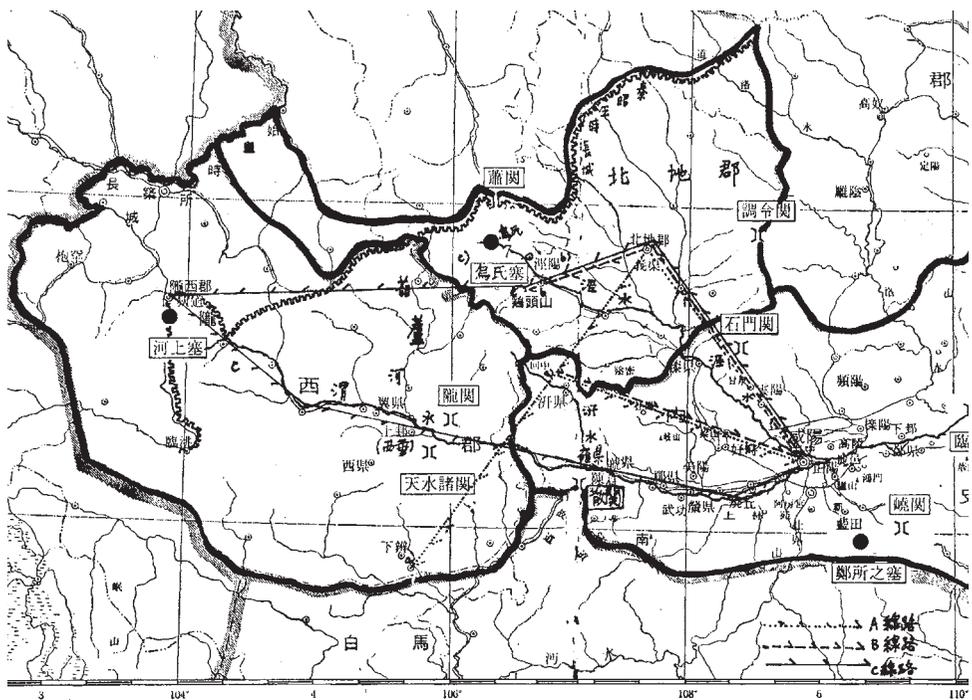


図1 始皇帝の西巡ルートについての張守節・胡三省・王京陽説のイメージ図
 (新宮学編『近世東アジア比較都城史の諸相』白帝社 2014 pp.263の図に基づく)

⁴ 王京陽「関于秦始皇幾次出巡路線の探討」『人文雑誌』1980年第3期 pp.71。

⁵ 同上。

以上の三説をまとめていうと、張守節の解釈をA説と名付けて、「鶏頭山」位置をa、「回中」位置をa)として、胡三省の解釈をB説と名付け、「鶏頭山」位置をb、「回中」位置をb)として、王京陽の解釈をC説と名付け、「鶏頭山」位置をc、「回中」位置をc)とまとめて図化すれば、図1となる(北地郡の範囲は辛徳勇『秦漢政区与边界地理研究』pp.61の図に基づく)。

2-5 三説の特徴と問題点 図1に示したように、A説・B説・C説の相違点は、aとa)、bとb)、cとc)を表記したとおり、鶏頭山の位置について、A説ではaの隴西説、すなわち隴西郡の成州にあたるとした一方で、B説ではbの北地説、すなわち北地郡の原州の笄頭山として、C説ではc = bと主張した。また、回中の位置について、A説ではa)の内史説、すなわち岐州或は汧にあるとしたが、B説ではb)の北地説、すなわち北地郡安定の高平にあたり、C説ではc)というのは北地郡の鶏頭山以西と秦長城以東のエリアにあたると思った。

以上のような「鶏頭山」と「回中」の位置についての異なる解釈に従って、始皇帝の一回目の巡行線路は、古来A線路とB線路という2つの主張があった。図1に示したように、

A線路(唐・張守節：……の線路) = a隴西説 + a)内史説、即ち咸陽→北地郡治→内史の回中宮→隴西郡鶏頭山→咸陽。

B線路(元～宋・胡三省：- - -の線路) = b北地説 + a)内史説、即ち咸陽→北地郡治→北地郡鶏頭山→内史の回中宮→咸陽。

C線路(今日・王京陽：—の線路) = c北地説 + c)北地・隴西説、即ち咸陽→北地郡治→北地郡鶏頭山→北地郡の回中→隴西郡の回中→咸陽。

上述した三線路における問題の所在を以下のようにまとめる。

1) A線路は胡三省が指摘したように、「鶏頭山を出て」から「回中を過た」という順に相反する問題。

2) B線路は「鶏頭山を出て」でなく、むしろ「鶏頭山に入って」という問題。

3) A案は「回中」を「回中宮」と読み変えた理由は不明であるが、「回中を過(よぎ)た」の「過」とはよぎる・こえる・わたる意、つまり通過する意味であり、いずれも宿の意味ではないので、「回中宮」を通過するとの解釈は不自然である問題。

4) A B C線路のいずれも咸陽→北地郡→隴西郡というルートを仮定したが、それは「始皇巡隴西・北地」という司馬遷がいう隴西→北地の順番に反する問題。

3 始皇帝西巡行ルートの特案

3-1 西巡の地名に関する2つの重要な史料

1) 『漢書』匈奴伝に「孝文十四年（前166）、匈奴単于十四万騎入朝那蕭関、殺北地都尉印、虜人民畜産甚多、遂至彭陽〔=朝那〕。使騎兵入燒回中宮、〔師古曰く「回中、地在安定、其中有宮也」〕候騎至雍甘泉」とある。

ここで、匈奴の侵入ルートはA. 14万騎は蕭関に入った。B. 騎兵だけで回中宮を焼いた。C. ものみの騎兵は雍の甘泉に至った。地図で確認すると分かったことは、1つは回中と蕭関や雍との密接な関係、2つは回中と蕭関の間に畜産が甚だ多い。

2) 『漢書』武帝紀に「〔元封4（前107）〕四年冬十月、行幸雍、祠五時。通回中道、〔応劭曰く「回中在安定高平、有險阻、蕭関在其北」〕遂北出蕭関〔師古曰く「蓋自回中通道以出蕭関」〕、歴独鹿・鳴沢、〔服虔曰く「独鹿、山名也。鳴沢、沢名也」〕とある。

地図で確認すると、漢の武帝はこのルートによってA. 咸陽から雍に行って祭祀した。B. 雍から回中道を通り蕭関を出た。C. 蕭関を出で、独鹿山や鳴沢を過ぎて北辺境へ行った。

ここで分かったのは、1つ、雍に行幸し、祭祀する。2つ、回中とは道と宮ともいえる。3つ、祭祀して辺境視察へのルートがある。

3-2 『史記』の十八文字史料の再読

以上の史料はやや後の時代のものであるが、その2つの史料に「蕭関」「北地」「畜産」「回中」「回中宮」「雍甘泉」「行幸雍」「祠五時」「独鹿」「鳴沢」などのキーワードを注目するべきであろう。この漢代の皇帝が都を離れ、北辺境を視察したルートと道順を参照して、秦の始皇帝の第一回巡行と較べて前掲した『史記』の十八文字史料の「二十七年、始皇巡隴西・北地、出鶏頭山、過回中」を再読すれば、始皇帝は

咸陽→（渭水に沿い、旧雍の諸侯都）→（汧水に沿い、汧渭之会諸侯都・隴山を越え）隴西（郡に入り、今日の牛頭河に沿って西南へ、祖先の発祥地の西垂の旧大夫都、さらに西へ隴西郡治の狄道・河上塞・臨洮長城）→（渭水や葫蘆河に沿って、北へ北地郡に入り）鶏頭山を出て、回中（地域の烏氏塞・蕭関・旧長城・牧苑の地）を過（わたり）（北地郡治の義渠・涇水に沿って）→咸陽へ戻ったと考えても無理がないだろう。

始皇帝西巡行のこのルートにしたがって、次節から渭水流域において旧雍城の諸侯都の禁苑、汧水流域において旧汧渭之会の諸侯都の禁苑、西垂の旧大夫都の禁苑、涇水上流の関塞地域の禁苑を検討しよう。

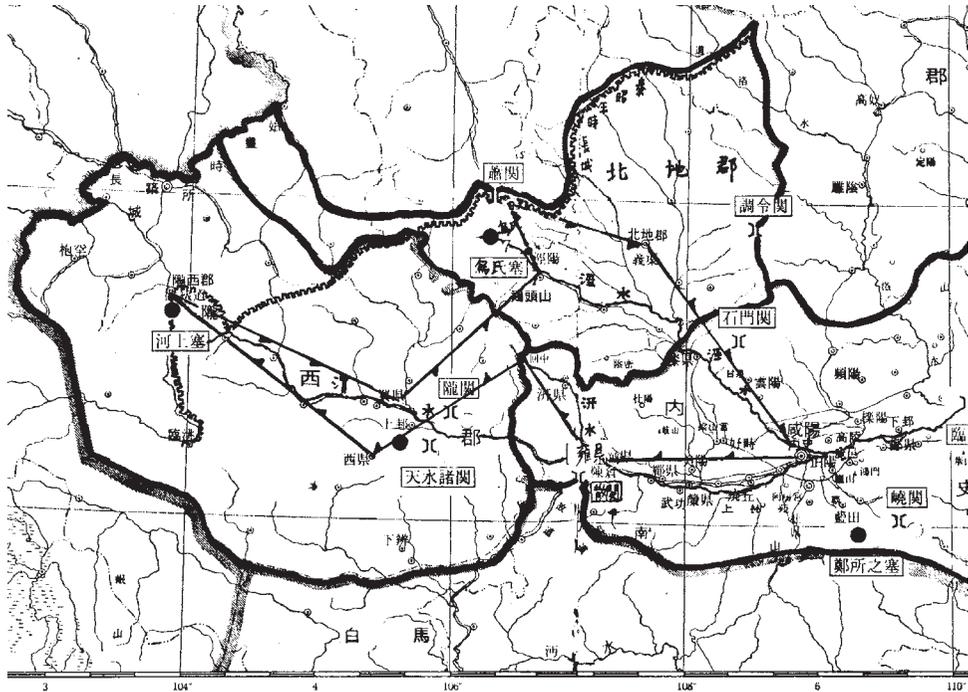


図2 始皇帝の西巡ルートイメージ図
 (新宮学編『近世東アジア比較都城史の諸相』白帝社 2014 pp.263の図に基づく)

二 内史(近畿)における雍城旧都と渭水沿岸の禁苑群

内史(近畿)西部における禁苑群を検討する前に、始皇帝が第一回巡行で先祖たちを祀る目的について述べたい。この点について、下文にも言及する先行研究は、始皇帝は秦の発祥地の西県へ行って祖先を祀っただろうと論じているが、本論は西周時代から戦国秦国にかけて存在したいくつかの都が、始皇帝の先祖報告先であっただろうと考えている。そう考える理由を説明するために、まず張光直(イエール大学・ハーバード大学の人類学科教授)氏の「聖都」と「俗都」説を紹介しておきたい。

1 秦の雍城旧都＝「聖都」の存在

1-1 三代の遷都の「聖都」「俗都」説。20世紀に考古学者張光直氏は、殷王朝の13回遷都(19代目の盤庚王の殷墟は最後の都)の史料にしたがって、さらに夏・殷・西周三代にも新都＝「俗都」、旧都＝「聖都」＝祖廟がある都という存在の特徴を以下のように指摘した⁶。

在最近的一篇論文裡，我們嘗試指出三代都城遷徙上的一個規律，並試求其

⁶ 張光直「關於中国初期『城市』這個概念」『文物』1985年第2期 pp.64。

解釋。這個規律是：『三代國號皆本於地名。三代雖都在立國前後屢次遷都，其最早的都城卻一直保持着祭儀上的崇高地位。如果把那最早的都城比喻作恆星太陽，則後來遷徙往來的都城便好像是行星或衛星那樣圍繞着恆星運行。再換個說法，三代各代都有一個永恒不變的「聖都」，也各有若干遷徙行走的「俗都」。聖都是先祖宗廟的永恒基地，而俗都雖也是舉行日常祭儀所在，卻主要是王的政、經、軍的領導中心。聖都不變，緣故容易推斷；而俗都屢變，則以追尋青銅礦源爲主要的因素。』

1-2 筆者の秦大夫都・諸侯都・諸王都の旧都＝聖都説。近年、秦の雍城旧都＝「聖都」で、咸陽＝「聖都」という説がある⁷。筆者も自己説があり、すなわち図3のように秦の遷都は、大夫の都→諸侯の都→諸王の都の順に分けられ、いずれも旧都＝聖都となったと考えている。具体的にいうと、大夫都の西垂は諸侯都の雍にたいして旧都＝聖都となったが、諸侯都の雍も諸王都の咸陽にたいして旧都＝聖都となった。ゆえに西垂と雍とも諸帝の祭祀「時」がある。したがって始皇帝の第一回巡行の前半には、咸陽から渭水に遡り、秦旧都の「聖都」をめぐるって祖先祭を行ったと考えられ、そこでの宿る場所は昔の宮殿、すなわち秦帝国時代の離宮禁苑であろう。



図3 秦の9回遷都：大夫の都→諸侯の都→諸王の都のいずれも旧都＝聖都
 (松丸道雄・永田英正『中国文明の成立』講談社 1985 pp.148-149の図に基づく)

該当地域の禁苑は渭水の河辺に散在していた。まず、その場所を確認しよう。都の咸陽から真西へ流れる渭水の両側および雍県から西北へ汧水に沿う諸宮殿群があり、

⁷ 潘明娟・吳宏岐「秦の聖都制度與都城體系」『考古與文物』2008年第1期。

また咸陽から北西へ流れる涇水の両側にある諸宮殿群もある。図2に示したように、前者は始皇帝が西巡したとき咸陽から雍城故地へ、そして西北へ隴山を越え隴西郡に入ったルートの沿線の禁苑群であり、後者は始皇帝が北地郡から涇水に沿って、咸陽へ帰ったときに宿った禁苑であると考えられる。

2 内史境内の雍城旧都の禁苑群

2-1 「隴坂道」による西巡のスタート。ここで、始皇帝が西巡行したとき、司馬遷の「二十七年、始皇巡隴西・北地」という記載に拠って先に隴西郡に行き、それから北地郡へ行っただと考えれば、始皇帝の巡行線路はまず当時の「隴坂道」を踏んで、内史境内の雍城旧都に至ったはずである。

秦一族は西周初期（前1100頃）に東方から西戎の侵入を防衛するため、西垂の地（秦の隴西郡、今日の甘肅省天水市）に派遣された。約千年を経て西の臨洮（長城の西端）から咸陽までの隴坂道を造った。この道は西垂（犬丘）という大夫の都や雍城という諸侯の都や咸陽という諸王（後の帝国）の都を貫く大動脈であるといえよう。

始皇帝が全国を統一してから翌年の第一回の巡行線路にこの道を選んだ目的は、1つは何百年の戦争を止めて、空前の帝国を立ち上げたことを報告するため、旧都の祖廟で祖先祭を行おうとしたこと、もう1つは西戎と接している辺境の長城を視察しようとしたことと考えられる。

2-2 該当地域における秦宮殿の先行研究

秦の宮殿については文献と実地調査や考古発掘によっていくつの成果があり、以下何清谷・王学理・徐衛民三氏の研究をまとめる。

1) 何清谷の研究は関中範囲に文献によって確認できた10の秦宮殿があり、そのなかに該当地域にあたるものは長陽宮・平陽宮・橐泉宮・蕲年宮・梁山宮・望夷宮などがある（何清谷『三輔黄図校釈』「秦宮」中華書局2005年）。

2) 王学理の研究は特に咸陽周辺における宮殿について文献と考古学両面に於いて確認した。例えば絳陽宮、西垂宮、虢宮などの存在を証明して論じた（王学理『咸陽帝都記』「巍峨的宮殿建築」三秦出版社1999年）。

3) 徐衛民の研究は特に渭水流域における歴代秦の都城に於いての宮殿を確認した。しかし、以上の先行研究は少なくとも二点の不明を残している（徐衛民『秦都城研究』「秦都附近的離宮別館」陝西人民教育出版社2000年）。

1) いずれも該当地域のみの研究ではないので、該当地域の特徴はみえない。

2) 旧都の宮殿と禁苑（離宮も）との関係は分からない。

2-3 雍城とその副都への変身

『史記』秦本紀に「徳公元年、初居雍城大鄭宮」とあり、『史記』曹叅世家に「初攻下辯・

故道・雍・釐」とある。『元和郡県志』二に「天興県本秦雍県。秦国都也」とあり、『漢書』地理志に「雍、秦惠（徳）。公都之」とある。『清一統志』二三六に「故城在鳳翔県南」とある。

雍城はもとの都城だったが、のちに咸陽や櫟陽の都に建立によって副都へと姿を変えたことが重要である。

雍城は前350に咸陽に遷都した後、政治の中心としての機能がおわり、先祖の廟や御陵が所在した祭祀の都となった（先行研究には聖都という）。

A 祖廟での副都の祭祀機能

雍城は秦代の都として最も存在期間（143年）が長いものであり、秦一族の祖廟の所在地で、始皇帝が雍城で戴冠するときに住んでいた大鄭宮を含む宮殿、秦の人たちの宗廟区や帝王の寝殿などがある。

古に業績を得、祖廟で報告する慣例がある。『後漢書』班超伝に「目見西域平定、陛下举万年之觴、薦勳祖廟、布大喜於天下」とある。始皇帝が、統一して始めの巡行先にここを選んだのは、祖廟で勳を薦げたためと考えられる。

B 御陵での副都祭祀機能

ここは始皇帝の何人かの先祖が埋葬されているところである。雍城遺跡にある秦景公（前577-537年）の墓は、現在発掘された秦墓の中で一番大きいものであり、そこには「秦公一号大墓博物館」が建てられている。

C 「雍時」での副都祭祀機能

『後漢書』馮衍伝下に「陟雍時而消搖兮、超略陽而不反」とあり、李賢の注に「雍、県名、属右扶風、故城在今岐州雍県南。時者止也、神靈之所止也。『史記』曰、秦并天下、祠雍四時、漢加黒帝、謂之五時」とある。ここでいう「秦并天下、祠雍四時」とは始皇帝の一回目の雍旧都への旅の目的だといえる。

始皇帝の巡幸先のどこで宿ったか、龍崗秦簡禁苑律に明記してあるように「禁苑」がそれにあたるのは違いないので、以下雍城旧都における宮殿について述べたい。

2-4 内史西部にある雍城旧都における宮殿

1) 平陽封宮：『史記正義』に

「宮名、在岐州平陽城内也」とあり、もとに秦武公の朝宮だったが「封宮」という名で祭祀に関わる宮殿と考えられる。「平陽封宮」という銅器や「平陽封鼎」が発見された。

2) 虢宮：その場所は『漢書』地理志に「秦宣太后起也」とあり、今日、陝西省虢県の虢鎮に位置する。

3) 棧陽宮：『漢書』地理志に「棧陽宮、昭王起」とある。『史記』に秦王の政は嫪

毒の乱を平してから「遷太后於雍」したあとここで住ませた。『大清一統志』に「在今扶風県東北」とあり、『県志』を引き「云：三十里、遺址尚存」とした。

4) 蕘年宮（祈年宮・橐泉宮もいう）：始皇帝の戴冠式を受けた蕘年宮は、蕘年が求年なり、祈年宮ともいう。『漢書』地理志に「祈年宮、惠公起」とあるが、王先謙『漢書補注』に「祈一作蕘、見『始皇紀』」とある。秦惠公が立て、孝公の時橐泉宮と呼ぶ。『漢書』地理志に「橐泉宮、孝公起」とあり、今陝西省鳳翔県にある。『読史方輿紀要』に「橐泉宮在今鳳翔府内城東南隅、本名蕘年宮。蓋孝公重修更名。或云：今東湖即橐泉遺跡」とある。『史記』秦始皇本紀に

「9年、彗星が出現し、あるときは空いっぱい広がった。魏の垣・蒲陽を攻めた。4月、王は雍に宿泊し、己酉の日に戴冠、帯剣の儀式を行なった。長信候嫪毐が乱を計り、発覚した。王の御璽と太后（始皇帝の母の趙姬、毒と姦通し、二子を産んだ。毒、秦王の継父と自称）の印章を偽造し、各県の兵と宮殿の士卒、騎兵隊、および辺境の地の君侯の家来を引きつれ、蕘年宮を攻めて反乱を起こそうとしたところで、王がこの陰謀を知った。宰相の昌平君と昌文君に命じて兵を發して毒を攻めさせた。戦いは咸陽で行なわれ、数百人が蕘首された」と記した。「蕘年宮當」という瓦當の出土によって秦蕘年宮の場所は確認された。

以上のような副都の旧宮殿は、現役の俗都咸陽の宮殿にたいしての離宮とはいえ、そのエリアは禁苑ともいえよう。

3 隴坂道の通る汧水側の離宮

3-1 文献の記録

「汧」の位置については『史記』周勃世家に「西定汧」とあり、『水經注』渭水に「川水又東逕汧県故城北」とある。『史記』に「秦文公東獵汧田、因遂都其地、即此是也」とあるが、『名勝志』に「秦城在隴州南三里」とあり、隴州は今の隴県である。その地に天帝を祭祀する「鄜時」がある。

『史記』封禪書に「秦文公東獵汧渭之間、卜居之而吉。文公夢黃蛇自天下屬地、其口止於鄜衍。文公問史敦、敦曰、「此上帝之徵、君其祠之。」於是作鄜時、用三牲郊祭白帝焉」とある。『史記』秦本紀に「文公十年、初爲鄜時」とあり、『清一統志』二四九に「鄜、故城在郎州洛川県東南七十里」と記した。

3-2 汧水側の離宮遺跡

2010年以来汧水側における離宮群がいくつか発見されたが、その典型的な遺跡は尚家嶺秦漢建築址である。発掘者の報告⁸によると、

⁸ 陝西省考古研究院・宝鶏市考古研究所・千陽県文化館「陝西千陽尚家嶺秦漢建築遺址発掘簡報」『考古与文物』2010年第6期。田亜岐「陝西千陽尚家嶺秦漢建築遺址初識」『考古与文物』2010年第6期。

遺構はⅠ区とⅡ区という秦漢時代の建築（宮殿）址であり、当時の汧水側にあたる東西交通道路わきに位置した行宮であると判断したが、時代により駅伝や貯蔵場を兼用する施設であったとも考えられる。

遺跡の年代については、発掘者は遺跡に残している大量な戦国時代の葵紋瓦当・戦国～秦漢時代の大夔鳳紋瓦当及び前漢時代の方形回字形紋方磚などがあるので、この建築遺跡は戦国晩期に始建して、前漢の初・中期に破棄したと判断した。

発掘者の田亜岐氏はその遺跡の性格について、以下のように考えた。

1) 行宮説。ここでは春秋時代から咸陽～雍城～隴西への道路幹線であった。戦国秦の王や秦漢の皇帝はこの道路を利用して巡幸したとき、1日20か25kmの走行距離で計算すれば、その距離はまさにここより東の「汧渭之会」（汧水と渭水の合流）に見つけた「蕲年宮」遺跡まで、およびここより西に、今日の隴県の慕爾塬に見つけた2ヶ所の離宮遺跡までもとも20か25kmのところである。また、大夔鳳紋瓦当と「水鑑」などの遺物はいずれも秦漢の皇帝しか使わない建築材料と物件であるので、この建築遺跡は秦漢皇帝の行宮であると判断する。

2) 行宮かつ駅説。ここは東の雍城に30kmを離れて、秦漢の皇帝は雍城で祭祀を行ってからここを通過して、さらに「西巡」をしたところである。例えば『史記』秦始皇本紀に「二十七年、始皇巡隴西・北地、出鷄頭山、過回中」という西巡はまさにここを通過したはずであろう。そういっても、ここは皇帝の行宮のみならず旅人を泊まる駅施設だとも考えられる。

田氏の考えをまとめていうと、秦の始皇帝は巡幸したときに、「蕲年宮」のような旧都の宮殿や元よりか新築したかの行宮とも自分が巡行のために宿泊所だとしていた場所である。さらに、本論の冒頭に引用した龍崗秦簡の禁苑律にいう皇帝は巡幸するとき「禁苑中に舎（やど）る」という律文を対照すれば、再利用の旧宮殿と新築した行宮とも当時には「禁苑」と呼ばれたのは間違いないだろう。

ちなみに文献には汧水側にある「西垂宮」の記録があり、例えば『史記』秦本紀に「文王元年、居西垂宮」とある。その場所について二説がある。一は龍西郡・西県（現在甘肅省天水市）であり、一は『帝王世紀』に「秦襄公二年徙都汧」という説により、内史の汧水側にある。私見は遷都によって旧宮殿は名のみ残し、二ヶ所ともあったかと考えられるのだろう。

三 隴西郡の戦国秦長城と秦旧都の禁苑

始皇帝西巡行のもう1つの目的は、隴西郡にある秦先祖の発祥地での先祖祭祀を行うことである。これについて王子今氏は以下のように論じた。

而隴西西縣之於秦始皇嬴政、則是秦人東向進取的精神原點，是秦整個部族的故鄉。實現統一之後，秦始皇來到這裡，不可能不產生強烈的心理衝動。⁹

漢末の董卓は「隴西臨洮人也。性粗猛有謀。少嘗遊羌中、盡与豪帥相結」と（董卓伝）。「羌中」は羌族の居地、即ち今の青海・西藏及び四川の西北部と甘肅の西南部。

「西垂宮」は龍西郡・西県（現在甘肅省天水市）にある説は無視できないので、私の、秦の祖先が始めの遷都を行う前にも西垂宮があったという考えは、近年に発見された甘肅省天水市の大堡子遺跡によって証明された。

1 西周に西垂を保す犬丘・秦の大夫都

西周（前1023-前770）に、秦の造父は「以善御幸於周穆王」（秦本紀）、穆王の命を救ったことで趙城を封じられ、その一族は嬴氏でなく、趙氏になった。趙氏の大駱と嫡子の成・庶子の非子とも「犬丘」に住む記録があり、犬丘と西垂とも同じ地名である。「西垂」の本義は西境であり、後に地名となる（『水経』漾水）ので、時代による名がわかった。

『史記』封禪書に「秦襄公既侯、居西垂、自以為主少皞之神、作西時、祠白帝」とある。秦人の先祖は「西垂」に「西時」を作り、祖先神の「白帝」を祭ったのは秦の大夫国、そして秦帝国まで途絶えなく続いて、始皇帝の西巡したとき、ここで祖先神の祭祀を行ったといっても過言ではないだろうか。しかし、始皇帝の祭を行った場所や泊まる禁苑は何処にあったかと指摘するのは至難かもしれないが、近年の西県の秦時代遺跡の発掘はわれわれに助ける。

2 大堡子遺跡の秦祖先地の発見

2006年の発見で夯土建築址は26ヶ所、中小型の墓は400余基がある一組、と大型建築址は1ヶ所（21号建築址）があり、中小型墓葬9基、祭祀遺跡1ヶ所がある。

特に1ヶ所の倉建築址と大型祭祀建築址によって、ここは古の秦の初期国家だったと判断できた。

年代は春秋早期晩段、或いは春秋中期早段だった。場所は天水市の南西の礼県にあたる。大堡子山・西山・山坪の三つの古城遺跡とは

A 大堡子山城は長方形で、総面積25万㎡ほど、建築跡や墓葬など周代の豊富な遺跡が発見されている。また、青銅の編鐘などが出土した祭祀坑がこの城の関連史跡であることもわかった。秦公大墓は礼樂制度に貴重な資料を提供している。

B 西山城跡は、不規則な長方形で、10万平方メートルほど、春秋時代初期を遡る。

⁹ 王子今「秦始皇二十七年西巡考議」『文化学刊』2014年第6期。

城壁と水道を備えハイレベルな集落があった。

C山坪城遺跡は山頂と山腹に300mの版築城壁があって、周代の住居をうかがわせる大量の出土品があり、漢代には祭祀場所となっていたことがわかった。

これまで秦国祖先の所在地は文献のみでしかわからなかったが、ようやく考古学的に証明ができた。そこから肝心の「西時」はどこにあったかと推測すれば、この西漢水上游に発見した三つの城址のなかの西山遺跡は三ヶ所の中心となった「雷神廟」という高台遺跡は注目するべきと思う。特に該当遺跡の北方に、新鸞亭山漢代祭祀遺跡との位置関係を追求すれば、西時の場所はやはり「雷神廟」高台遺跡に当たりにある可能性が高いであろう。そして、始皇帝はその周辺における旧宮殿を泊まったと考えられる。

3 戦国秦の長城と関塞

始皇帝西巡行のもう1つの目的は、秦の根拠地となる「関中」の長城など軍事施設を視察することである。これについて王京陽氏は以下のように論じた。

秦始皇の巡遊雖然以東方原來的六國爲主、但是他的第一次出巡卻是到關中西北的隴西·北地兩郡。隴西·北地在寧夏和甘肅省的東部，原是西戎部族的遊牧地區，秦昭公時向西拓地、「築長城以拒胡」、括兩地於秦的勢力範圍之內。這兩地當時是西部邊防地帶、直接關係到關中地區的安全。始皇統一後的第二年（公元前220年）就先西巡、顯然是爲了視察邊防、解除東巡的後顧之憂。¹⁰

図1に示したように戦国秦の長城と始皇帝の長城は別になっていて、長城の西端となる臨洮（古に狄道と称す＝隴西郡治）段は洮水の東岸に沿って北へ走り、そして2つに分かれることが遺跡からわかった。

1つは北東へ走る秦昭王（前325-前251）の長城であり、もう1つは北西へ黄河に沿い北方へ走る、始皇帝のときに築いた長城であった。

ゆえに、考えられることは始皇帝が当時の隴西郡に巡行した目的の1つは、長城の臨洮段を視察してから、翌年に秦昭王長城の一部を修繕し、さらにその旧長城の外側に新しい長城を作った。同時に北地郡を西の黄河まで拡大した。

巡行先にあたる隴西郡の禁苑については、図1に標識したように隴西郡のなかに、渭水に沿う「隴関」「天水諸関」「河上塞」が散在したことに注目するべきである。それらの関や塞はみな始皇帝の巡行道にあたるので、始皇帝はそこまで視察したと考えられる。

以上の、秦族祖先の都城・秦人と戎人との間に長く攻防していた地域・戦国秦の長城の西端にあった場所、という三点によって、始皇帝は自分の第一回の巡行先となる

¹⁰ 王京陽「関于秦始皇幾次出巡路線的探討」『人文雜誌』1980年第3期pp.71。

該当地域で、先祖への祭祀・秦人の対戎人の辺境最前線の視察・当時の秦長城の西端を考察と関塞（翌年の秦帝国長城の建築）という目的があったと考えられる。その宿る場所となる禁苑の場所は発掘された当時の城にあたるのだろう。

四 北地郡・内史における先秦長城・関塞・牧畜苑及び禁苑

上述したように始皇帝は隴西郡の狄道・河上塞・臨洮長城を視察してから、渭水や葫蘆河に沿って、北へ北地郡に入り、『史記』の「出鷄頭」すなわち鷄頭山を出て、「回中」地域の烏氏塞・蕭関・旧長城・牧苑の地を「過（わた）り、北地郡治の義渠・涇水に沿って咸陽へ戻った。

1 北地義渠道を巡行する目的

義渠は『史記』秦本紀に「惠文王十一年、渠義渠」と記したが、『史記正義』に『漢書』地理志を引き「北地義渠道、秦渠也」とした。『読史方輿紀要』に「義渠城在甯州西北」とある。

義渠道は殷時代以前に西戎族の1つであり、元寧夏固原の草原と六盤山・隴山の両側に居った。春秋戦国時代になると、秦と魏に対抗できる大になる国を作り、ついに秦に滅ぼして「北地義渠道、秦渠」となったが、やはり始皇帝が自ら視察するべきところだろう。

2 鷄頭山関塞と秦昭王の長城（図1）

上述したように、鷄頭山は古典に二ヶ所があり、隴西郡にあり、北地郡にもある。北地郡の鷄頭山は今日涇源県にある。特に注目すべきなのは鷄頭山を出て烏氏塞や蕭関がある。

上にも紹介したように、北地郡はもとは義渠戎の地であったが、昭王の時占領し、長城を築いた。

3 烏氏倮の牧業と国の牧畜苑

烏氏は『史記』匈奴列伝に「岐・梁山・涇・漆之北有義渠・大荔・烏氏・胸衍之戎」とあり、『正義』引『括地志』に「烏氏故城在涇州安定県東三十里。周之故地、後入戎、秦惠王取之、置烏氏県也」とした。『史記』貨殖列伝に「有烏氏倮」とがり、『集解』韋昭に「烏氏、県名、属安定。倮、名也」とある。『呂氏春秋』當賞篇に「公子連從焉氏塞入。焉氏常即烏氏之転音」とあり、『清一統志』二五九に「故城在（平涼府）平涼県西北」とある。

『史記』貨殖列伝に「烏氏〔県名〕倮は畜牧し、（畜）衆（おう）きに及んで（これを）斥賣し、奇繪の物を求めて、間（ひそか）に戎王に獻遺す。戎王、其の償を什倍して、之に畜を與える畜、谷に用って馬牛を量るに至る。秦の始皇帝、倮をして封君

に比し、時を以て列臣と與に朝請せしむ」とある。

秦には牧畜を管理する役は牧師と呼び、彼ら国の牧畜苑の役人として働き、烏氏僕
は普通の牧師より入朝できる高い身分だった。実際には北地郡には数多くの国の牧畜
苑があった。

4 果家山秦漢離宮遺跡

1980年代に、涇源県香水鎮農民が果家山に偶然に一枚の巨型夔紋瓦当を掘り出して、
普通の瓦当なら、直径約15cmであるが、この瓦当の直径は42.5cm、高さ34cm、厚さ7cm、
最大直径47cmとある。

考古学者は地上から2mの下に敷き地煉瓦と排水パイプ及び小型夔紋瓦当がみつ
かった。

巨型夔紋瓦当は始皇帝の御陵の陵园と渤海湾の姜女石離宮遺跡及び河北省秦皇島離
宮遺跡でも発見され、較べるとここは一ヶ所離宮禁苑遺跡と判断できた。「回中宮」
かの説もある。

とにかく始皇帝が北地郡に行ったとき、ここで泊ったと考えられる。

以上の破棄された旧長城・関塞・広く存在する牧畜苑・近年発掘した禁苑遺跡を総
合的に考えて、始皇帝が北地郡に行ったとき、主な目的はやはり北と西の戎族への長
城・関塞・牧畜苑を含む防衛施設を視察したと考えられる。

5 涇水に沿う「簫関道」側の禁苑

上述したように始皇帝が西巡したとき、最後に北地郡から内史へ、涇水に沿う「簫
関道」を通ったと考えられるが、その旅にかかわる祭祀の場と離宮・禁苑は何処にあっ
たか。前者として考えられるのは「好時」であろうが、後者は「梁山宮」だと思っ
たので、それについて述べたい。

5-1 祭祀場の「好時」。『史記』呂不韋列伝に「嫪毐敗走、追斬之好時」とあり、『史
記』高祖本紀に「雍兵敗、還走、止戦好時」がある。

『史記』曹相国世家に「擊章平軍於好時南、破之」とある。『史記』周勃世家に「攻槐里・
好時、最」とあり、『史記』樊噲列伝に「擊章平軍好時、攻城先登、斬県令丞各一人」
とある。『漢書』高祖本紀の注に孟康曰く、「好時県名」とした。『読史方輿紀要』に「廢
県在乾州東南四十里」とある。

5-2 禁苑の「梁山宮」。梁山は、『読史方輿紀要』に「在乾州西北五里。山勢迂廻、
接扶風、岐山二県之境」とある。『漢書』地理志の好時県条に「有梁山宮、秦始皇起」
と記した。『史記』秦始皇本紀に「行所幸、有言其処者、罪死。始皇帝幸梁山宮、從
山上見丞相車騎衆、弗善也。中人或告丞相、丞相後損車騎。始皇怒曰：「此中人泄吾語。」
案問莫服。当是時、詔捕諸時在旁者、皆殺之。自是後莫知行之所在」とある。

梁山宮遺跡も発見したが、その場所は咸陽城より西北に50km離れた乾県の県城西郊外にあり、秦時代建築遺跡である。発掘者はその遺跡は始皇帝の行宮であると判断した。¹¹

むすび

1 秦の始皇帝が秦帝国を成立してから行った一回目の巡行の目的は、全国を統一して帝国を創った偉大な業績を報告する祖先祭祀を行うためのみでなく、これから東方六国旧地への巡行をする前に、帝国根拠地の関中地域における辺境の長城と関塞を視察して、「後顧の憂」を絶つためでもあった。その結果、翌年に戦国秦の長城以外に帝国の新しい長城を造り始めながら、始皇帝は東方六国旧地への巡行も始めた。

2 始皇帝の一回目の巡行ルートは司馬遷の記録を補完すれば（以下括弧内は筆者註）、咸陽→（渭水に沿い、旧雍の諸侯都）→（涇水に沿い、隴山を越え）隴西（郡に入り、今日の牛頭河に沿って南へ、西垂の旧大夫都、さらに西へ隴西郡治の狄道・河上塞・臨洮長城）→（渭水や葫蘆河に沿って戻り、北へ北地郡に入り）鶏頭山を出て、回中（地域の烏氏塞・蕭關・旧長城・牧苑）を過り（北地郡治の義渠・涇水に沿って）→咸陽へ戻った。

3 始皇帝の最初の巡行先は殆ど歴代秦人の都にあたる。秦帝国西部の禁苑は旧都（祖廟のある）所在地の宮殿及び新築離宮であったと考えられる。具体的に述べると、まず、秦の祖先が諸侯となった都の雍城と涇渭之会諸侯都、次に秦人が大夫となった西垂の都における先祖たちの宮殿にあたる。また、西部辺境を守る隴西郡と北地郡における関塞や旧秦長城へ視察する途中の離宮や行宮などにあたる。

¹¹ 徐衛民『秦都城研究』「秦都附近的離宮別館」pp.210-211。